

4. 症例報告一骨に特徴的な画像所見を呈したサルコイドーシスの一例

加藤 克哉 織内 昇 井上登美夫
遠藤 啓吾 (群馬大・核)
大竹 英則 (同・放)

ぶどう膜炎で発症したサルコイドーシスの経過中に、手背の腫脹・疼痛を契機として骨サルコイドーシスと診断された一例を報告する。

単純 X 線に左第 2 中手骨のほか右尺骨遠位端に境界不明瞭な osteolytic change が認められた。

骨シンチグラフィではそれらに加えて左脛骨や足趾にも異常集積がみられ、骨病変の部位・広がり診断に有用であった。

¹⁸F-FDG PET は、肺門リンパ節腫大や皮下腫瘤に加えて、骨シンチで異常の認められた骨病変を明瞭に描出し、Ga シンチグラフィと同様、本診断に有用であった。FDG PET は悪性腫瘍のみならず、サルコイドーシスの診断に対する有用性が示唆された。

5. ⁶⁷Ga scintigraphy 上悪性リンパ腫との鑑別が困難であったサルコイドーシスの一例

古橋 哲 苅込 正人 此枝 紘一
(川口市立医療セ・放)
大島 統男 (帝京大・放)
森 豊 内山 眞幸 (慈恵医大・放)
福光 延吉 (慈恵医大柏病院・放)

sarcoidosis は様々な臓器をおかす病因不明の肉芽腫性疾患である。今回われわれは、⁶⁷Ga scintigraphy にて全身のリンパ節に強い異常集積を認めた一例を経験した。若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は 28 歳の男性、頸部腫瘤を主訴に来院した。全身に腫大したリンパ節を多数触知、悪性リンパ腫の疑いにて入院となった。⁶⁷Ga scintigraphy が施行され、両側頸部、腋窩、鼠径および肺門、大動脈周囲などほぼ全身のリンパ節への強い集積が認められた。集積部位には著明なリンパ節腫大が CT にて確認され、生検により sarcoidosis と診断された。ステロイド投与により腫大は消失し、現在まで経過良好である。

sarcoidosis では腫大した肺門リンパ節への ⁶⁷Ga の集積が知られているが、肺外のリンパ節への集積は

比較的頻度が低い。本例のようにほぼ全身のリンパ節が描出されたのは稀と考えられた。

6. 乳腺悪性リンパ腫の 2 例

長谷川 弘 尾崎 裕 京極 伸介
新藤 昇 住 幸治 片山 仁
(順天堂大浦安病院・放)

今回、診断、および治療効果判定にガリウムシンチグラフィが有用であった乳腺悪性リンパ腫の 2 症例を経験したので報告する。

1 例目は 74 歳女性。1998 年 1 月右乳房に腫瘤を触知し、当院外科外来受診。右乳腺に局限した異常集積像が認められた。原発性の乳腺悪性リンパ腫の診断の元に右乳房切除、および腋窩リンパ節廓清が行われた。病理診断は B cell median size diffuse type の乳腺原発の悪性リンパ腫であった。

2 例目は 48 歳女性。1997 年 5 月左乳房に腫瘤を触れ当院外科外来受診。左乳腺部分切除術、および、CHOP 療法 5 クール施行されており、治療効果判定のため、ガリウムシンチグラフィが 4 回施行された。術後の組織標本により median size diffuse type の悪性リンパ腫と確定診断された。また化学療法前のガリウムシンチグラフィで骨盤部、および上腹部に異常集積を認め、全身検索の結果、骨盤内、腹部の病変が発見された。乳腺原発の病変と思われたが、ガリウムシンチグラフィにより他の部位の病変の存在が判明し、その後に行われた治療の効果判定に際しても有用であった。

7. 悪性リンパ腫再発時 re-staging における ⁶⁷Ga scintigraphy の成績

久山 順平 内田 佳孝 太田 正志
(千葉大・放)

悪性リンパ腫のステージングにおける Ga シンチの有用性はすでに広く認められているところだが、治療法の進歩にともない寛解の導入にもちこめる患者の比率が高まり、それとともに再発患者の診療の重要性が増している。千葉大学附属病院において Ga スキャンを、初発時・再発時のステージングにおいて使用した 42 症例を中心に、特に再発時のステージングでの有用性、および初発時の検査結果との関連を検討した。悪性リンパ腫の病変検出能は、再発時に

においても、初発時の結果と全く同等であり、再発患者の re-staging にも十分有効な検査法として利用できることが確認できた。また初発の時点で病変に集積を認めなかった症例においても、再発時には集積が示されることが高率にあり、これらの患者でも、Ga スキャンの使用をためらう必要はないことが確認された。

8. TEW 処理による全身イメージング撮像

—— TEW 法を用いた ^{67}Ga 腫瘍一日検査法の検討 ——

木下富士美 油井 信春 戸川 貴史
(千葉県がんセ・核診部)
秋山 芳久 (同・物理)

分解能の良い低エネルギーコリメータと散乱線除去法である TEW 法とを併用し、 ^{67}Ga の低い 2 つのスペクトラムのみでの画像作成を試みた。その結果、従来画像よりも良質な結果が得られることと、TEW 処理によりカウントが 40~70% に減少するなどの欠点があること、解決法として物理的、生理学的減衰の少ない投与早期 6 時間の ^{67}Ga early 画像を前回報告した。しかし、この方法は全身撮像にはソフト・ハードの面で不可能であった。今回、煩雑なコリメータ交換作業がなく、一連の検査として、本撮像法を全身・局所撮像可能なように装置のバージョンアップを行ったので詳細を報告すると共に、症例を提示し、全身イメージでの early 撮像法の有用性につき検討し、一日検査法の可能性を模索し報告した。

9. 腎外傷症例における $^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ 腎シンチグラフィによる評価

浅野 雄二 堀池 重治 増田 和貴
青木 由紀 神宮司公二 太田 幸利
石井 勝己 (北里大・放)

目的：腎外傷症例における $^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ 腎シンチグラフィによる評価について検討した。

対象：平成 6 年 6 月から平成 10 年 5 月までに腎シンチグラフィを施行した腎外傷患者 10 例を対象とした。

まとめ：腎シンチグラフィは腎外傷症例における

残存腎機能を評価する上で有用と考えられた。腎外傷の残存機能は損傷の重症度を反映し、血流残存域に依存していると考えられ、腎外傷における治療法は血流を残すような治療法が望ましいと考えられた。受傷早期では受傷時の影響が残っていると考えられ、残存腎機能を評価する上では、受傷後 2 週間以降に検査を行う必要があることが示唆された。

10. 新しい腎深さ補正法を用いた $^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ 腎クリアランスの精度の検討

長谷部 伸 内山 勝弘 篠原 広行
國安 芳夫 (昭和大藤が丘病院・放)
新尾 泰男 山本 智朗 (同・中放)
永島 淳一 (都多摩老人医療セ・核放)
吉岡 克則 (GE 横河メディカル)

$^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ 腎シンチグラフィを施行した 61 例について、CT での実測データに基づき身長 (H cm) 体重 (W kg) をパラメータとした腎深さ補正式 (右腎深さ Dr (cm) = $16.40 \times (W/H) + 1.59$, 左腎深さ Dl (cm) = $17.19 \times (W/H) + 1.04$) を用いて腎摂取率を算出し、Bubeck 法による TER との相関を求めた。また従来の腎深さ補正式 (Tønnesen, 伊藤法) を用いた腎摂取率も算出し比較した。われわれの補正式に基づく腎摂取率は TER と良好な直線相関を認めた ($r=0.89$) が、従来の補正式でも相関に大きな差はなかった ($r=0.88$)。しかし、従来の補正式から求めた腎摂取率は、われわれの式によるものと比べ、より低値を示し、これは、従来の式が腎の深さを過小評価していたことによると考えられた。

11. $^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ による RI angiography から移植腎の血流は評価できるか？

小泉 潔 井上 真吾 佐口 徹
垣内 秀雄 (東京医大八王子医療セ・放)
阿部 公彦 (東京医大・放)

1 回循環による腎での抽出率の高い $^{99\text{m}}\text{Tc-MAG}_3$ は RI angiography にて血流相に引き続き速やかに機能相に移行する。したがって、血流相と機能相との区別が困難な症例もある。移植腎を対象に血流の評価を客観的に行う一つの定量的指標を考案し、視覚的評